

新しい表紙 そしてA4判の「鉄と鋼」

編集委員会和文会誌分科会

主査 木原諄二*

「鉄と鋼」のA4判化と表紙デザインの一新

新しい年を迎えて「鉄と鋼」が大きく変わりました。まず判がB5からA4になりました。このことによって図表が比例して大きくなり、より判り易くなるのではないかと思います。また、論文をはじめ記事に使用する活字を大きくし行間もややあけることによって、記事そのものの読み易さも向上することになります。因みに従来は論文1頁2,250字でしたが、1頁2,490字までしか詰めないことに致しました。(面積に比例して詰めると2,700字程度入ります。)

新年度からと言うわけではありませんが、軌を一にして、編集の方針を少し転換しました。それは、論文の前に掲載していた展望・解説・技術資料などのレビュー的な記事のうち教養・文化性が高くエンジニアとしての知見を豊かにすることに資すると思われるものをISIJ情報ネットワークの部分のはじめに掲載することに致します。たとえば、'92年5月号や同じく7月号に載った、二酸化炭素問題についての解説と同様のものは、今後はISIJ情報ネットワークに掲載されることになります。また、鉄鋼協会としての工学一般の状況に対する意見の表明などもここで行われることになろうかと思います。

要するにISIJ情報ネットワークは鉄鋼協会の単に会員に対する掲示板の役割に甘んじないで広報活動の要としての位置づけをもって編集されることになります。

「鉄と鋼」の内容について和文会誌分科会が会合の場で直接関係し、企画性を発揮しているのは実はISIJ情報ネットワークについてです。論文は和文会誌分科会専門委員と校閲を臨時に依頼される会員によって審査され、パスしたものを投稿順と専門別に配列した事務局の作業を見ただけで、論文掲載について企画性を発揮する必要はないのです。勿論投稿規定などの起案検討は重要な任務ですが、経常的なことではありません。

'93年1月号になって表紙が変わったということが、誰にもわかり易い「鉄と鋼」の変化であろうと思います。デザイナーの参加も得て行われたコンペから二段階の選考過程を経て、最後に残った作品に更にいろいろお願いをしてできたのがこの表紙です。デザイナーにはデザインのコンセプトがあるだろうとは思いますが、選んだ方にも表紙を眺めているといろいろな想いが湧いて来ます。

表紙デザインの読み方

表紙デザインは表と背が中心です。裏表紙は従来と同じく広告が載ります。背表紙に発行年号を白抜きにした円形の色マークが入りました。これは発行年号とともに変わります。したがって背を見ただけで何年発行と言うことが一目で判ります。これは読もうとする者にとっての一つの利便だと思います。

さて表表紙ですが、当初のデザインでは巻番号より発行年と号番号の方が目立ちましたが、分科会と編集委員会での検討の過程で反対になりました。鉄と鋼の字の色が異なることについてはいろいろ意見がありましたが、鉄の方は南部鉄瓶を思わせる錆色、鋼は鋼らしい色調になっているかと思います。

デザインは六角形を主体とし緑系と紅系とを組合わせた幾何学模様が基調となっております。会員の皆様はこの模様を見て何をお考えになるでしょうか。

私自身は分科会や編集委員会の折に申したことですが、次のように考えてみました。まず六角形は立方体を体対角線の方向から見た時のシルエットです。つまり α 鉄の(111)方向が揃った世界に冠たる我が国の自動車用鋼板を表わしているように思うのは専門畑へのこじつけに過ぎるでしょうか。表紙の上下が(110)方向、左右が(112)方向となります。

次に色に関してですが、'92年まで会誌の表紙の色が継承されています。これは全くの偶然で、デザイナーには何の注文もしたわけではありません。しかし結果として大変良かったと思います。伝統の継承です。伝統を重んじながらそれを土台に未来へ伸展しようと言う本会にふさわしい選択であったと思います。

緑から紅、これを温度の象徴と見れば、「鉄が鋼」になるまでの全てのプロセスの温度とも、また鋼が使用される環境の温度とも理解されます。色を何のたとえと見るかで会員の皆様にもそれぞれのお考えがあらうかと存じます。

以上、和文会誌の編集に携わる者として、会誌デザインが一新されたこの機会に編集方針などを含めて一文を寄せさせて頂きました。

* 東京大学工学部